

# 野外型簡易施設を利用したきのこ栽培技術の開発に関する研究 平成19年度～21年度（県単）

西井孝文

最近の自然食志向の高まりから、原木栽培品に近い大型のヒラタケの需要が伸びており、より栽培しやすく、商品性の高い菌株の開発と栽培技術の確立が望まれている。そこで、当研究部で選抜、育種したヒラタケ菌株から、栽培しやすく商品性の高い系統を選抜し、簡易施設を利用して収穫できる栽培技術を確立する。

また、県中央部の山林に自生し、美味しく幻のきのことしてされるオオイチョウタケの、林地ならびに林地以外での継続した発生技術を開発する。

## 1. ヒラタケ選抜株の発生試験

商品性の高い大型の系統として選抜した0系統を用いて、5月に広葉樹オガとフスマを培地基材とした2.5kg菌床を作製した。温度20℃、湿度70%の培養室及び空調の無い屋内で6ヶ月間の培養を完了した11月より、温度10℃、湿度90%の発生室、空調管理を行っていない屋内、野外（シイタケ人工ほだ場）で子実体の発生を促し、4ヶ月間の発生量を調査した。なお、屋内の培養及び発生温度は、きのこ栽培試験棟の通路を用いたため、夏期でも30℃以下、冬期でも10℃以上であった。

結果は表-1のとおりで、空調下、屋内培養いずれにおいても同等の発生が認められたが、野外では低下した。原因として、冬期の低温による発生休止が考えられるため、何らかの加温処理を行うことにより、継続発生が可能であると考えられる。

表-1. ヒラタケ0系統の発生試験

発生場所	供試数(個)	ロス数(個)	子実体発生量 ( $\bar{m} \pm SD$ ) (g)	培養条件
空調施設	10	0	708.0 $\pm$ 116.22	培養室
室内	10	0	765.0 $\pm$ 72.76	培養室
野外	10	0	466.0 $\pm$ 112.66	培養室
空調施設	8	0	666.3 $\pm$ 100.42	室内
室内	8	0	641.3 $\pm$ 112.56	室内
野外	8	0	368.8 $\pm$ 101.34	室内

## 2. オオイチョウタケの林地埋め込みによる発生試験

2001年春に、勢和スギ林および白山竹林にオオイチョウタケ菌床50kgを埋め込んだ試験地において、いずれも2002年秋より6年間継続発生が確認された（表-2）。しかし、発生地が毎年1m程度移動し、一度発生した地点では発生が認められないことから、再度の発生を目指して、発生終了地に改めてオオイチョウタケ菌床を埋め込んだ。

表-2. 竹林における発生量

発生年度	発生本数(本)	発生量(kg)
2002	18	0.3
2003	7	0.3
2004	19	0.6
2005	29	1.5
2006	153	7.8
2007	73	1.9